マコと一葉の剣　グラス・オニオン

小倉　慎平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マコと一葉の剣　グラス・オニオン

【Ｎコード】
Ｎ７９２２Ｚ

【作者名】
小倉　慎平

【あらすじ】
十二才の少年マコルディス・クイーデル王子（通称マコ）はクーデーターと共に国を追放された。サンガルド王国で王の側近だったアルミゲウ・ギース（アル）それに新たに加わった旅の仲間であるリーアムース・ベルドラド（リア）とクローネンバーグ・ユイソナー（クロネ）と共にシエラの街に行き着いた。

その街で人々は古の魔女の脅威に怯え、どこからともなく現れたヴァイオレーターと呼ばれる怪物の来襲に怯えていた。それに加え、

ヴァイオレーター退治と称して街で好き放題する魔導士軍団に街は不安と不満を抱えている。

マコたちは街を支配するこれらの脅威から解放しようと立ち上がるが、やがて影が恐ろしい陰謀を繋ごうとしていた……

旅の仲間と一葉の剣

巨漢の男が狭く薄暗い路地を駆け抜けて行く。
男は建物の裏手に積み上げられた木箱や樽を、その巨大な体とは裏腹に、巧みに避けて走った。途中でいくつかをなぎ倒したが、それは追手を妨害するためだった。
一方、男を追う警官隊は額に汗の玉を浮き立たせながら、進行方向上にある障害物をたどたどしく乗り越えた。
男は黒いボロきれのようなローブのフードを頭からすっぽり被り、全力で走っているにも関わらず、汗一つかいていない。それどころかフードの下からは唇がにっと吊り上がり、男がニヤついている事がわかる。
余裕すら見せている。
男は四件の殺人を犯していた。一件目は三人、二件目はふたり、そして三件目と四件目はそれぞれひとりずつ。生意気な態度を取ったヤツらに思い知らせてやったのだ。彼を相手に自分たちがどれだけ無力かという事を。そして無能な警察から逃げ切る事は、男にとっては簡単な事だった。
「逃げても無駄だ！　追いつめられるだけだぞ」
うしろからひとりが叫んだが、男の口もとを余計に吊り上がらせただけだった。
狭い路地をしばらく走ると、光とともにざわめきと熱気が漏れ出す通りにさしかかった。路地を抜け出し出店の建ち並ぶ大きな通りに出る。
にぎわう客たちでつくられた群れの間を、男は無理やり掻き分けながら進んだ。客たちはうしろからいきなり押されたり、体をねじこまれたりして、驚きの声をあげた。また、罵声も聞こえた。
絶対に捕まるものか。大衆を掻き分けながら男はニタニタ笑って

思った。能のない警官屋どもに、この大魔術師であるジゴラさまが捕まるわけはないのだ。
決して。

十二才の少年マコルディス・クイーデル――ふだんはマコと呼ばれていた――は人ごみでにぎわう市場を歩いていた。きらきらと輝く目が市場中のあちらこちらへ行ったり来たりを繰りかえしている。ずっと旅をしてきた彼にとってこんなに大きな街は久しぶりの事であったし、にぎわう人々の群れもまた懐かしみのあるものだった。
「しっかし、まあ、これだけ大きな街だと、こうもにぎわうもんなんだな」
アルミゲウ・ギースは幼いマコにくらべるとやたらと背が高かった。一九才という年齢を考えると、成長期を過ぎた体はもう大人としてできあがっており、ふたりの身長差はあって然るべきだったが、それをふまえたとしても、アルの身長は高かった。
アルは金色の長髪の持ち主だった。よく天使の毛のようだと言い表されてきたし、女の子たぎが思わず振り返ってしまうほど整った綺麗な顔立ちをしていた。瞳の色はハシバミ。腰にはベニヤの板を何重にもしてかたどったような短剣を差している。短剣とはいえ木製であるため、刃もなく、切ることはできない代物だった。
対するマコは赤みがかった茶色の髪にグリーンの瞳。背中には自分の背丈と同じ大きさの大剣を背負っていた。
「うん、そうだね。でも、ずっと旅して来て初めてわかったけど、ぼくらの街ってほんとうに大きなところだったんだね」どこか寂しげで悲しみに満ちたマコの声。旅立った故郷の事を思っている。
「そうだな。いまはもう戻れないが、いや、いつか必ず戻ってみせるさ」
アルはマコの頭をぽんと叩いてやった。これはアルがマコを元気づける時にやるしぐさで、これをやられると彼はいつも勇気を奮い起こされるのだった。

そういった信頼関係がふたりの間には築かれているし、アルは必要ならば身をていしてでもマコを守る心づもりでいる。マコはそれを知っているし、だからこそアルを完全に信頼してその身を預けている。

「なんなのよ、ふたりしてしんみりしちゃって」一緒にいたリアが不満そうな声を漏らした。「せっかくの市場なんだから、もっと明るくいこうよね。ホラ、ああおいしそうな匂いもする！」

リアの本名はリーアムース・ベルドラドといった。ふたりが彼女と出会ったのはついこの間の出来事で、この家出少女はふたりが断ったにも関わらず勝手に着いて来てしまった。出会いは決して深い意味のあるものではなかったが、こうして彼女はマコたちの仲間としていまでは深い関係にある。

そしてもうひとり、旅の仲間がいた。マコよりもふたつ年上のお姉さんで、クローネンバーグ・ユイソナー。仲間からはクロネと呼ばれていた。髪の色は黒く艶やかで、前髪は眉の上でまっすぐに切りそろえられており、うしろ髪は膝裏の間接部分にまで届いていた。目は少し赤みがかった濃い紫色をしており、その瞳の中心部から外に放射線状の模様があった。彼女の瞳はすべてを飲み込もうとしているように、引きつけるような力があった。

マコ、アル、リア、クロネの四人は北に向かって旅を続けており、街を通り抜けるついでに市場の観光をしていた。

たのしい見学になるはずだったのだが、いつもトラブルを呼ぶ四人のことだ、そのトラブルがまっすぐ彼らの前方からこちらに向かって来ていた。まるで磁力に引き寄せられるかのように。

その気配をいち早く察知したのがクロネだった。細い人差し指をまっすぐ前に向け、首だけをマコに向けて言った。「なにかしら。あちらから騒がしいのが来るけど」

マコはクロネに合わせて立ち止り、彼女が指差す方向を凝視した。

「ホントだ。なんだろう」

マコは首を傾げて考えた。遠くで群衆がざわついている。そのざ

わつきがだんだんとこちらに近づいているのがわかった。
「お祭り騒ぎってわけでもなさそうだな。ん？　なんだかうしろも騒がしいぞ」
アルの言った通り、うしろからもなにかの騒ぎが聞こえる。「どいてください」などと叫び声が聞こえた。
前方からもやはり声が聞こえた。なにかを追っているのだろうか。「待て」やら「逃げられんぞ」などの叫んでいるようだ。どれも怒まじりの声だった。
始めのうちはなにが起こっているのかマコにもわからなかったが、だんだんとその正体がつかめてきた。
前方からみすぼらしい格好をした男が人ごみをかきわけて出てきたのだ。そのうしろからはその男を追う警官たち。どうやら、人ごみの中で捕り物劇が行われているらしい。
ぼろぼろのローブを全身に被った男は、進行方向からも追っ手が来ているとわかると、立ち止まってどちらに進もうか迷いだした。だが決して男は焦ってなどいなかった。それどころか楽しんでさえいるようにマコには見えた。
それがあまり良い兆候だとは思えない。
そのうちに追っ手が前後から近づいてきた。
警官の必至の形相から、この男が殺人を犯したのではないかとマコは懸念した。実際、男の目からは人を平気殺せる人間特有の氷のような冷たさを放っていた。
「さあ、もう観念するんだ」警官隊はジゴラをとり囲むと、拳銃を向けた。
そう言われても諦める男ではない。彼はすぐ近くにいたマコに目をとめると、マコの腕をぐいっと引っ張って、一瞬ののちに捕らえてしまった。男の左腕がマコをがっちりとつかまえ、右手はマコの頭に向けられている。密着した男の体から汗と尿の入り混じったような悪臭がマコの鼻を刺激した。
「おめえら、身を引かねえと、このガキの頭が吹っ飛ぶぜ」

自称大魔術師ジゴラが脅しをかけると、警官たちがひるんだ。彼に向けられた手はぼんやりと光っており、その道に精通していない一般の人間からも、男が魔法を使おうとしていることがわかる。そして男の言う言葉が真実だということも。

アルたちは余裕の表情で突っ立ったまま動じていない。どうやら助けてくれる気はなさそうだ。自分でやれということか。どのみち、骨の折れる仕事じゃないさ。

「ハッタリじゃねえぜ。さあ、道を開けろ。こいつの頭が吹き飛ぶまえに！」

ジゴラが命令をするが、どうしても警官隊たちはこいつを逃がす気はないらしい。この男がしでかしたのはそれほど重要な罪なのだろうか。マコにとってはどうでもいいことだったが。とにかく男がはやく自分を解放してくれないかと願った。なにしろこの男は臭いのだ。

「落ち着け、おまえは私欲のために大勢殺した。また罪を重ねる必要もあるまい」

男を追って来た警官隊のなかでも老年の男が辛抱強い声で言った。威厳のつもりか、鼻の下にはちょびひげを生やしている。

「ちっ、状況がわかってねえようだな」ジゴラがぼそりとつぶやいた。

それを聞いてアルがジゴラのまえに歩み出した。

「なんだ、てめえは？」ジゴラは相変わらず、すごみの効いた声で暴言のように吐き捨てた。

「その子を放したほうが身のためだと思うがね」アルはたしなめるように言った。

「なんだとお？」ジゴラは不服そうにうなった。「おい。こら、ぼうず。俺様はなあ、魔術の天才なんだよ。自慢じゃあないが、この魔術で何人も殺してきた。このガキの頭を吹き飛ばすぐらい、わけねえんだよ」

そんなもの、自慢でもなんでもないじゃないか。ジゴラの腕のな

かでマコは思った。人を殺した事を自慢できる人間なんて、きっと神経をすりきらせてしまっているにちがいない。
「あまり犯人を刺激しないでください」
警官隊のひとりがアルに注意した。丸眼鏡をかけていて、どことなく頼りなさそうだ。素の表情なのだろうが、困り顔に見えた。実際にアルの行動には困っていたのだろうけど。
「そうゆうこった。おい。あんたらも道をあけないと俺様を刺激することになるぜ、警官屋さんたちよ。その刺激で爆発しちまうかもしれねえ。そうしたら、このガキの首はあるべきところにゃ、もうくっついてねえぜ」
その言葉に警官隊たちは動揺し、うしろにさがった。
「やれやれ、忠告はしておいたからな」言いながら、アルもさがった。
ちらりとアルに目をやったのだが、彼は薄ら笑いすら浮かべているように見えた。どうやらこの状況を楽しんでいるようだ。
などと考えていると、なにかが背中の剣に触れる感触がした。
「なんだか知らねえが大切そうにしてるじゃねえか。見たところ剣のようだが、上物じゃあないのか？」
どうやらこの魔術師の男がマコの大切な剣に手を触れたらしい。他人に大切な剣を触られたことで、マコはむっとした。
「そんな汚い手で触らないでよ」この男の臭くて汚い手が触れるのはたまらなく嫌だった。
マコの言葉を聞くと、ジゴラは不機嫌そうな顔をし、その顔が怒りに揺れた。
「ガキのくせにこのジゴラ様に命令しようってのか。もう勘弁ならねえ。殺してやるわ！」
ふたたびジゴラが右手をマコに向けると、てのひら付近の空気が揺れ、赤く光った。熱も帯びている。
「まて、止めるんだ、ジゴラ！」ちょびひげの警官が叫んだ。
「無駄い。思い知らせてやる！」

ジゴラがマコの顔に向かって炎を放とうとすると同時に、マコも行動に出た。素早くジゴラの手に自分の手を向けると、彼も魔法を放ったのだ。

火を消すなら水をかけてやればいい。

とは口で簡単に言えるものの、魔法でもってそれを実行するのは至難の業だ。なにせ空気中にある魔法の素である元素を魔法の実体であるエレメントに変えるのには多少の時間を要するからだ。だがマコはそれをいとも簡単にやってのけてしまった。

マコの水のエレメントがジゴラの炎のエレメントを飲みこみ、最初からそこになにもなかったかのように消し去ってしまったのだ。

「僕だって魔法は使えるんだ。『ガキ』だからってあまくみたのが間違いだったね」

マコはジゴラの胸に手を当てると、炎のエレメントを発生させた。炎が燃え上がり、ジゴラは飛び退いた。

ジゴラは胸を両手で叩きながら、燃え移った炎を消した。

炎が消えると、ジゴラはマコを睨みつけた。

「だから何だってんだ？　ちょっと魔法ができるからって調子に乗りやがって。あまり大人をなめるなよ！」ジゴラは肩で息をしながら怒鳴った。「こうなったら、この市場ごと消し去ってやるわ！」

ジゴラは両手をまえに突き出すと、そこから風のエレメントが発生し、ぐるぐると渦まいた。エレメントはどんどん大きくなり、渦まく風は竜巻となりその竜巻がさらに成長を遂げようとしている。

「マコ、やばいぞ！」うしろでアルが叫んだ。

マコは背中の剣を取り外した。

鞘は右側面から空洞になっており、柄を握って横に倒せば、簡単に取り外すことができた。

マコは剣で成長途中の大きな竜巻を斬った。

剣が一瞬の輝きを放ったかと思うと、竜巻は消滅してしまった。

それを見守っていた群衆は息を呑んでいた。マコの迅速かつ相手を上回る技術よりも、彼らはマコの手にしている剣の美しさに魅入

られていた。
剣の刀身と柄の間には鍔がなく、奇妙な形をつくっていた。柄は銀色で、ライフル銃の銃床のような形をしている。刀身は光沢を放つ濃緑色で、木の葉をまんなかで二つ折りにしたような形だ。桜の葉のふちのように刃の部分が細かなギザギザになっている。この刀身と柄が大剣を一枚の葉のように見せていた。
ゆえにこの剣は一葉の剣と呼ばれている。
ジゴラは怒りにまかせて右手を振り上げ、もういちど炎のエレメントをつくってそれをマコにぶつけようとした。
だが、マコのほうが行動は早かった。
一葉の剣を軽く振ると風が発生し、ジゴラを押し倒してしまったのだ。
マコはジゴラに近づき、顔面近くの地面に剣を突き立てた。刃が触れてもいないのに、ジゴラの頬は切れた。傷は深くないが、出血があったし、男をおどすには十分だった。
「ほんとうなら、首が落とされているところだったね」マコは笑顔になってジゴラにそっとつぶやいた。
それで十分だった。男の戦意を失わせるには。
マコは満足そうにうなずくと、剣を逆手で持って切っ先を鞘に突っ込むと、それを柄を上に押し上げることで剣全体を鞘に納めた。

「ご協力ありがとうございます」警官のひとりが言った。この警官は顎の下に小さな切り傷があった。小さいときに転んで怪我したもので、決して喧嘩や逮捕劇での格闘の末にできた怪我ではなかった。彼は体格こそ良いものの、暴力を極端に嫌っていた。
「うん、大丈夫。自分を守っただけだから」
それが当然とでもいうように、ジゴラを倒してしまった少年の態度は素っ気なかった。
「なにが身を守っただけよ」少年と一緒にいた赤毛の少女が苛立たしげに言った。髪型はショートヘアで、半袖シャツにつなぎの短パ

ンという少年のような格好をしている。その少女がマコの頭頂部に拳を落とした。「巻きこまれるかと思ったじゃない」
「痛いよう。リア」マコは殴られた箇所をしきりにさすった。
「あら、マコなら大丈夫よ。絶対に他人を巻き添えにしないわ。わたくしは信じていましたもの」クロネが横から出て来て、マコの頭を確認した。「まあ、ひどい。こぶになっているじゃない」
「うん。ぼくは大丈夫だよ。それよりもさっきの竜巻の被害は？」マコはクロネの手を振り払いながら言った。
「マコが一瞬で消し去ってくれたから、皆無さ。唯一の被害と言えば、一葉の剣で切られた男の頬くらいかな」
アルは警官たちによって両脇をがっちりとつかまっているジゴラを見た。一瞬、目が合ったが、すぐに逸らされてしまった。まあここで、魔法による悪あがきをする気はなさそうだ。
「さてと、旅の再開だ」アルは言った。
一同はうなずくと、アルを先頭にもともと向かっていた方向に歩き出した。
「あ、ちょっと。なにかお礼を――」
警官の申し出も聞こえないように、マコたちは歩む足を止めなかった。警官たちはその背中を呆然と見ていた。
「彼らはいったい何者なんだろう？」
顎に傷のある警官が言った。隣にいた警官は、さあ、と首を傾げた。

クロネがコケた。
足をもつれさせ、前方に豪快に倒れたのだ。両手を突き出したその姿は空を飛んでいるかのようだった。実際、地面に顎を撃ちつけた衝撃で意識が一瞬だけぶっ飛んでいたが。
「いったああい！」クロネは泣き叫びながら立ち上がった。「何なのこの道は。デコボコしすぎよ」
黒いワンピースドレスの長いスカートの裾をはたく。

「あんたって良く転ぶわね。本当に歩くのが下手くそ。何度転べば気が済むのよ？」リアが呆れて言った。
本日八回目である。それはクロネも良く心得ていた。何回転べば自分の気が済むのかは知らなかったが。
「う、うるさいわね。何回転んだってわたくしのかかか、勝手よ。口を滑らせっぱなしのあなたに言われたくないわね」
クロネの言った『何回転んだって』のくだりは良くわからないが、リアが口を滑らせっぱなしだということにはアルも納得した。言わなくても良いことばかり言ってしまい、そのせいでトラブルを起こすことが多かったのだ。
「ああら。そんなに饒舌なのがうらやましいのかしら。この場合、上舌と言うべきかしらね。あなたの口は喉を詰まらせた老人のような言葉しか出せないものね。オホホホ」と下品に気品高くリアは笑ってみせた。
クロネは顔を真っ赤にして震えている。言いかえしてやりたいが言葉が思いつかないといった感じだ。
「あ、あなたは、じゅんか――そうよ！　あなたは潤滑油を塗りたくってるのよ！」
やっと出て来た言葉がこれだ。リアはぽかんとしている。まったく効き目なし。
言いたいことはわかるぞ。うしろでアルがうなずいた。潤滑油を塗ったように言葉が滑り出てくるのだと、君は言いたいのだろう。だがそれは逆に褒め言葉になっているのではなかろうか。
その台詞に満足したのか、クロネはどうだと言わんばかりの目線をリアに送っている。
「そんなんじゃ、わからないわよ。ホレ、言いたいことがあるのなら、わかり易く伝わり易く言ってごらんなさい」
リアは頭を少し上に傾いで、目線だけでクロネを見くだして言った。
「うう……それじゃあ……ええっと……」

効果がなかったことを知ると、クロネは次に何かびしっとした言葉を決めてやろうと躍起になった。だが、いくら頭をフル回転させようと、ついに言葉は見つからなかった。どうやら彼女の例文辞書は落丁だらけらしい。ついにクロネはマコに泣きついた。

「何とか言ってやってよ！」

よしよし、と頭をなでるマコを見ているとどっちが年上だかわからなくなる。たしかクロネの方がふたつ上だったよな、とアルは思い出していた。

「リアもいつも言葉が多いんだよ。少しは気をつけてよね。これはいつも思ってることだけど」マコは言った。「あとクロネもリアがあなのは知ってるんだから、少しは聞き流すことを覚えないと」

「聞き流すってのは聞き捨てならないわね」とリアは言ったが、少しクロネで遊びすぎたと、この辺にしてやることにした。

クロネもマコに言われたのなら、と仕方なくリアの事は忘れようとした。

言い合いが治まると、四人はふたたび歩き出した。いつものようにおぼつかない足取りで、クロネは後方に少し離された。

そして本日九回目となる転倒を果たした。

夜には彼らは崖の淵にいた。さきほどの街を出てずっと進み、小さな林の細い道を辿ったら、崖に行き止まったというわけだ。しかもそこは船の先端のように突き出ていて、狭い。日も暮れて戻る事もできず、仕方がないので四人はここで野営することに決めた。

焚き火が四人の顔を薄いオレンジに照らし、ちらちらと影を躍らせている。マコの隣にはクロネが寄り添い、火をはさんで向こう側にアルとリアがちょっと離れて座っていた。

「あーあ。いつも野宿ばっかり。たまにはふかふかベッドで寝たいわ」リアは不服そうに言った。「市場ぐらいゆっくり見たかったのに、すぐに街を出るし。観光ぐらいしてもよかったんじゃない？」

「仕方がないだろう、あんな騒ぎのあとじゃあ。それに金がないん

だから、物も買えないし」アルが諭すように言った。
「アンタたち、本当に王族なの？　まったくの貧乏じゃない」
「王族なのはマコだけさ。おれは付き人みたいなものだった。それに言っただろう、おれたちは追放されたんだって」
「はいはい。敵に王国を乗っ取られたんでしょ。それだって、あやしいわねえ」
　リアは目を細めてアルを見た。
「あなたって、ホント、世界の情報に疎いのね」とクロネ。「一ヶ月前にサンガルド王国でクーデーターがあり、王子が追放された。それって、絶対にマコのことじゃないのよ」
　それを聞いてリアが首を横に振った。
「ふたりが本当のことを言っているとは限らないわよ」
「あら、一緒に旅をしてきてふたりが信じられないっていうわけね、あなたは」
「そうわ言ってないわよ、ただわからないって言ってるだけ」
「そう言ってるように聞こえる」
　クロネが目を細め、リアを睨むようにして見つめた。
「オッケー、わかったわよ」とリア。「アタシだって本気で疑ってるわけじゃないわよ。それで、追放された王子さまはこれからどこへ向かおうというわけ？」
「それはわたくしも知りたいわ」クロネが同調した。「いままではただなんとなく着いて来ただけだもの。これからは目的を持って行動したいわ」
「ここかずっと北へ向かってある人物に会おうと思ってるのさ」アルが答えた。「きっと協力者になってくれるはずだ。再び俺たちの手に国を取り戻したい」
「なるほど、じゃあ仲間を集めて国を乗っ取った敵をやっつけるってわけね」
　リアの言葉にマコは苦笑いになった。
「説得するに決まってるわ！」クロネが声をあげた。

「なんで、敵を説得しなきゃいけないのよ！」リアが言った。
「それはクーデターの首謀者がマコのお母さんだからじゃない」クロネは声を落として言ったが、その声は十分マコにもアルにも届いていた。
「うん、倒すよ」それを聞いていたマコがきっぱりと言った。「説得できる相手なら、もうとっくに父さんがしていたはずだ」
マコの父親であるモーガンは国王として、なにより彼女の旦那としてマコの母親を説得ようとした。だがこのクーデターは最初から周到に用意されたものであり、彼女がマコの父親に近づいた時にはすでに計画は始まっていた。そして彼女はマコを生んだ。その出産が計画的なものだったかどうかはわからないが、国王殺害は彼女の計画のリストに載っており、見事に実行されたというわけだ。
さらにマコには兄がいた。ルーカス・クイーデル。ルーカスは母親であるサーラに引きこまれ、一緒に国取りを行った。彼はマコを処刑する事を考えていた。兄は弟の才能に嫉妬していたのだ。しかし母親のサーラはそれに反対し、マコを国から追放した。
それが情けなのか母親としての情なのかはアルには計り知れなかったが。
マコの側近であったアルは、混乱の最中、一葉の剣を渡され、追放されたマコのもとへと送くられた。こうしてふたりの旅は始まったわけだ。アルに剣を渡し逃がしてくれた老アルテネローは、いつしかマコが帰って来て国を取り戻してくれる期待をその震える唇で口にした。だがその望みが叶うかどうかは、アルでさせ知らない。
しばらくのあいだ孤独の旅がふたりで続いた。いまでは仲間が四人に増えた。楽しい仲間だ。
「だから、この旅はきっと過酷なものになると思う。ふたりとも嫌なら無理に着いてこなくていいよ。別に無理に連れ回しているわけじゃないから」
「わたくしは、マコに命を助けられたもの。あなたの助けになるならなんだってするわ。そのために着いて来たんですもの」クロネが

意思を示した。
「アタシだってアンタたちといたほうが楽しいもんね。それに勝手に着いて来てるのはアタシだし」
ふたりが彼らと共にいる道理はないのだが、それでも一緒にいてくれてマコは嬉しかった。すくなくともこうして話している時はこれからの不安や、過去への悲しみを忘れることができた。
「さてと――」アルはおもむろに這って移動すると、小さな茶色い鞄を手に取った。ここにはなけなしの全財産やら、食料などといった旅の必需品が入れられている。その中から小さな木彫りの像を取り出すと、アルは元の位置にもどって来た。
「まあ、毎晩と飽きないわね」リアがなかば呆れ声で言った。
「習慣というやつだよ。それに人は毎日同じ生活の繰り返しの中にいる。それも飽きずにね」
アルが木彫りの像を地面に立てて置くと、焚き火が像に神々しいオレンジ色の影を投げかけた。像はアルが彫った手作りで、世界を創造した女神の姿をしている。この女神の像に向かって毎晩、寝るまえに祈るのが、彼の日課であった。
アルは毎日、この信仰心を絶やしたことはない。
彼は目を閉じ、ゆっくりと祈りの言葉を口にした。
「夜の監視者よ、月の女神よ、母なる神よ。今日という日の御恵みに感謝します。火、水、土、風に宿る精霊神にも同じ感謝と敬意を……そして闇から我らをお守りください。我らに安らかなる眠りのお導きを。そして新たなる一日という安全が我らにあらんことを……」
アルに続いて三人も同じように祈りの言葉を口にする。最初は嫌がっていたリアも覚えてきたようで、すらすらと文句を読んだ。クロネはまだぎこちなく、アルの言葉を聞いて、それになんとか追いつこうとしているようだ。
祈りが終わるとアルは女神の像をまた鞄の中にしまった。
「さてと、寝るか」アルはそのままごろんと横になり、倒木に背を

当てて寝た。リアも大きなあくびをひとつして、両腕を頭上いっぱいにのばしながら、倒れた。マコは一葉の剣を胸もとにひきよせて、赤子のように眠った。その近くではクロネがマコの寝顔を幸せそうに見つめて満足そうにうなずいた。そしてゆっくりと目を閉じた。

焚火の炎はまるで女神の守護のように、眠りについた旅の四人を守るようにしてそのオレンジ色の光で包みこんでいる。実際、この炎には悪しき気を寄せつけない力があった。

炎はしばらく彼らを見守り、日が昇るにつれてそっと姿を消していった。

ヴァイオレーター

日が十分に昇るころには火も消え、薪はすべて灰と化していた。旅の一行はすっかり目覚め、出発の準備も整っていた。

「いったん引きかえして、昨日の分かれ道で別の道を辿ろう」アルが言った。

「まあ、そっちにしか道はないもんね」とリア。

一葉の剣を鞘のベルトを使って背中に取りつけると、林へと続く道を凝視した。その目は真剣そのものだ。

「どうしたの？」あまりにもマコが林を凝視しているので、心配になったクロネが首を傾げた。

マコは片手をクロネに向けただけで、なにも言わなかった。ただじっと、林のほうを見つめている。彼の耳は奇妙な音を感じ取っていた。軍団が闊歩するような音。地面が震えている。

「なにか来る」マコは言った。

「なにが――」アルは質問の途中で口をつぐんだ。いまやその音はアルにも聞こえていた。音は確実に近づいている。

「なにあれ？」リアが指差した。林を突っ切るまっすぐな道、その木立のあいだの遥か向こうに点が見えた。その物体がこちらに近づいているようだった。しかも目測ではかなり大きい。

「あら、なにかしら？」クロネもそれに気づいたようだ。

「さあな、嫌な予感しかしないけどな」アルは額を右手でぴしゃりと叩いた。

「うん……」マコは心ここにあらずといった声を出した。自然と手が剣の柄にのびる。

点は、はっきりと形がわかる程度にまで近づいていた。白銀色の球体が、こちらに向かって転がってきているのがわかる。その球体は太陽の光を反射させ、ぎらぎらとした光をいやらしく放っている。

「あれは……」クロネが両手を口に当てた。
「ヴァイオレーターだな」アルがクロネの言葉を引き継いだ。
ヴァイオレーター――一ヶ月前、どこからともなく現れた怪物の呼び名だ。気性は非常に荒く、凶暴。その数は日を追うごとに多く発見されており、大量に人間を捕食することから世界を滅ぼす存在などと言われている。ヴァイオレーターの出現により、カタストロフィーを唱える者が現れるほどだ。
滅亡の噂などいつの時代でも他にやることがないのかと思うほど、ほぼ毎日持ち出される根拠のない議題だった。
転がってくるヴァイオレーターに目を凝らすと、完全な球体ではなく、帯状のウロコでおおわれていることがわかる。ある世界ではダンゴムシという昆虫に見えただろう。だが、マコたちにはそんなことはわからなかった。ただ球体のヴァイオレーターが転がって来るように見えるだけだ。
「俺に任せろ」アルが前に出た。
「大丈夫なの？」マコが訊いた。
「まあな」彼は腰に差した木製の短剣に手を触れながら前に出た。
「自信がないなら、変わるわよ」うしろからリアがふざけて言ったが、アルはそれを無視し、答える代りに短剣を体の前で立てた。
「樹木は土に宿り、水がそれを育む」アルは唱えると、短剣を地面に突き立てた。すると、その部分から転がりくるヴィオレーターに向かって地面が割れた。割れ目は蛇のようにうねりながら敵に向かってのび、その先から一本の木の根が生えた。次の瞬間にはたちどころに無数の根が地面から突き出し、みるみるうちに木の壁をつくった。
壁はヴァイオレーターの進行を妨げた。相手がぶつかると、まず壁が震え、つぎに大地が揺れた。
「止まったか？」揺れがおさまると、アルは木の壁を凝視しながら言った。
「静かね。死んじゃったんじゃない？」リアが言った。

「まさか、壁にぶつかっただけで……」アルが答えた。
「ねえ、なんか聞こえない？」クロネが不安そうな顔をアルに向けた。
「これって、まさか――」マコは叫んだ。アルも彼と同じ答えに至ったのだろう。驚愕の顔でうなずいた。
「なんなのよ、これ？」リアが不安になって声を張り上げた。そうしなければいけなかったからだ。さきほどまで小さかった音がいまは耳を聾せんばかりに大きくなっている。なにかがアルのつくった壁の向こうで唸っている。その音は空気を震わし、耳をつんざく勢いだった。
「なにも訊かずに壁の前から離れるんだ」アルがゆっくりと警告した。マコもクロネもおとなしくその指示に従ったが、リアだけは納得がいかないようだった。
「なんでよ？」とリア。
彼女、その理由を聞くまで指示に従うつもりはないんじゃなかろうか。マコは心配になった。その説明をしている時間なんてないのに。時間がないことは音の回転速度でわかる。マコはその音の正体を知っていたし、それが危険極まりない音だということも承知していた。
アルはリアの肩をひっつかむと、マコたちとは反対の方向へと引っ張った。その瞬間にそれは起こった。アルがつくり出した木製の壁が膨らみ、そこが熱を帯びて赤く染まった。かと思うとその部分が炸裂し、紫色の禍々しいビームがまっすぐとのびてきた。それは中心にいくほど赤みがかり、外側にいくほど青っぽかった。
「なんなのよ、これ？」リアが驚きの声をあげた。
「ヴァイオレーターの攻撃だ」アルが答えた。「大気中の元素を無理やり振動させて、そうやってできたエネルギーを放出しているんだ」
大気中には火、水、土、風の四つの元素が含まれており、一般的に魔法と呼ばれる奇術は、この元素を用いて行われる。人間がもつ

エーテルというエネルギーを放出し、元素と結合することによりエレメントと呼ばれる物質に変化するのだ。火の元素を用いれば、火のエレメントが生まれ、炎を発生させる。水の元素ならば、水のエレメントが生まれて水が発生するといったぐあいだ。それが掟であり、法である。しかし、ヴァイオレーターがやってみせたのは、元素を無理やり拘束、収斂し、振動を起こさせてエネルギーを発生させる攻撃だ。まさにその法や掟を破る行為だ。故に彼らはヴァイオレーター（違反者）と呼ばれている。

残った壁ががらがらと音を立てて崩れた。もはやヴァイオレーターは球体をしておらず、這いずりまわる甲殻類となっていた。鎧の先には顔があり、意思なき目が虚ろにどこかを見ることもなく見つめている。ヴァイオレーターは彼らを発見するなり、猛スピードで突進してきた。

「飛び降りるぞ」アルが言った。

この狭い場所では逃げ惑うことも、ましてや突進してくるヴァイオレーターの横をうまく通って奥の道へ進むこともできなかった。そこでアルは飛び降りることを決意し、マコも状況を理解して彼に向かってうなずいてみせた。

「それしか方法はなさそうね。こんな狭い場所で戦って、どうせ振り落とされるだけだもん」リアはそう言って崖の淵に向かった。

「え、本気なの？」クロネは当惑した表情を浮かべた。

「ああ、そうだ。できるだけ同時に飛んで、みなで固まって落ちるぞ」アルはマコに目を向けた。「あとはわかるな。頼んだぞ、マコ」

三人は同時に飛び降りた。クロネだけが、一瞬ためらったのち、ちらりとうしろを見やった。すると背後には甲殻類のようなヴァイオレーターが無数の足を必死に動かして、こちらに向かっている。彼女はぞくぞくと身を震わせた。クロネは虫が嫌いだった。とくにあの細い脚が。

クロネは肚を決めて飛び降りた。

マコルディス・クイーデルは顔面に風を受けながら、頭からまっさかさまに落ちていた。下から吹きつける風は強力で、目が痛かったが、彼はしっかりと前を見据え、迫りくる地面を凝視している。崖は結構な高さがあり、地面まではまだほど遠かった。

マコの少し右前方をアルが両手を広げ、その少しうしろをリアが両手をバタつかせながら落下していた。クロネの姿はなかったが、自分よりうしろを確認することができなかった。

とにかくマコは自分の仕事をすることにした。右手を首のうしろにまわし、一葉の剣の柄を握る。それを背中から取り外すと同時に、大きく振りまわしながら剣を体の前に持ってきた。すると緑色の美しい剣がその姿を現した。

少年が剣を地面に向かって一振りすると、突風が生じ、地面とぶつかって砂埃を巻き上げた。その風が上に向かって吹き荒れ、マコたちの体を少しだけ押し上げて落下速度をいくぶんか軽減した。

マコはその衝撃を利用して体を半回転させると、足から着地した。その少し前にアルが片膝をついて着地し、それを追うようにリアが背中から落ちた。彼女は背中で体を支えたまま上空を見る姿勢になっており、足は顔の上に投げ出されていた。

マコは辺りを見渡し、クロネがいない事を確認すると、上空を見上げた。そこにも彼女の姿はなかった。まだ崖の上にとどまっているのだろうか。ふと、羽を持ったさっきとは別のヴァイオレーターが近くの上空を飛んで行くのを目にした。あれが足につかんでいるのは、どこか人の形をしているとマコは思った。

「クロネがいないよ。まだ崖の上にいるのかも。もしかしたらヴァイオレーターが―？」

「クロネなら、あれに捕まったわよ。アタシ、見たもん」リアが着地というよりは落下したままの姿勢で言った。指は飛行型のヴァイオレーターを差している。

「それを早く言ってよ！」マコが声を張り上げた。

「大丈夫だろ。いざとなったら雷を落として、逃れるさ」アルがの

んきに言ったが、マコは事態がそれほど気楽なものではないと思った。彼が心配して見守る中、飛行型のヴァイオレーターはどんどんと遠ざかるばかりだ。

「捕まったときに頭をぶつけて、気を失ってたわよ」体を回転させて立ち上がりながら、リアが言った。

「それを早く言えよ！」今度はアルが声を張り上げる番だった

ジョンとクロネ

ジョン＝アルバート・クラウスは憂鬱だった。
まったく面白くない。
彼は街の東側に隣接している森を、足もとの地面をじっと注意深く観察しながら歩いていた。
森といっても街の外に人工的につくられたもので、木々は離れた位置に等間隔に並び、生い茂る葉が空を完全に隠すことはしなかった。今夜は病弱な母親が久しぶりに調子が良く、特製のジャンバシチューをつくってくれることになっていたので、こうして野生のジャンバ茸を収穫していた。ふだんなら、久しぶりの母親の手料理がうれしくて、うきうきした気持ちでこの狩りを楽しんだだろう。だがジョンはそんなうれしい気分を味わっている余裕がなかった。というのも、彼がご執心であるリルネ嬢が別の男に恋をしているからだ。
それだけではなく、ふたりはいつのまにやら親密な関係へと発展していた。しかもその男が王都から来たよそ者で、そいつの素性は一切が謎だった。いったい、あんなやつのどこが良いのだろうか？
ジョンとリルネは産着をその身に着けた時からの付き合いだ。よく一緒に遊んだし、ふたりだけの秘密も共有した。それなのに新参者が級に彼女を奪っていったのだ。
これが憂鬱な気分でなくて、どんな気分になれというのだ？
ジョンは紺色のズボンの横に美しい装飾の施された柄を持つ片手剣を差し、十五才にしては思慮の深い青い目を下に落として土に生える野生のキノコを探しながら、緑深い草の上を踏んで歩いた。彼の足もとには上等な大きさのジャンバ茸が胸を張って草の間から頭を出していたが、心乱れているジョンはそれに気づかず、キノコをまたぎこしてしまった。そのすぐ前にもキノコはあったが、彼はそれ

も見逃した。これでは盲目の人間のほうがよほど多くのジャンバ茸を収穫できそうだ。
そんなキノコ探しでもままならないジョンであったが、頭上を王者のように浮遊する危険だけは感じられずにはいられなかった。
始めはなんとなく、嫌な気配だった。ジョンはこういった危機を察知する能力は小さなころから備わっていた。彼はその予感を信じることとし、木の陰に隠れて上空の様子をうかがった。危険が近づいてくるという感覚はぐんと強くなって、心臓の高鳴りは早さを増した。
巨大な影が空を横切った。それはジョンの青い瞳に羽を広げた姿を映した。ヴァイオレーターだ。ジョンは背筋がぞくぞくと震えるのを感じた。その身ぶるいはどことなく心地よかった。おそらく自分にも父親とおなじ武人としての血が流れているのだろう。
だが、やはりその肉眼で見るヴァイオレーターは恐ろしいだけであり、ジョンはその心地よさを無理やり締め出した。巨大な昆虫のようなその体は銀色で、太陽の光を受けておぞましい光沢をどこともない場所に投げ放っていた。そいつは浮遊しながら耳のうしろに生臭い息を吹きかけられるような、不快な羽音を響かせている。それに――
それに、あの足にぶらさがっているのは人じゃないのか？　やはりそうだ。ひときわ長いうしろの足にある二本の小さな鉤爪で、少女の両腕を器用につかんで運んでいる。死んでいるのだろうか。少女が暴れている様子はない。それどころかぐったりしている。
ヴァイオレーターは木と木の間の上空を通過し、向こう側の木の葉に隠れてしまった。ジョンは相手を見失わないように木の陰から木の陰へと移動した。ヴァイオレーターの図体はでかく、その体重のためかのろのろとした速度で移動している。そのため、追いかけるのは安易なことだった。
ジョンは次に移動した木の幹に肩を押しあて、首を突き出した状態で剣の柄を握った。木に登ってそこからジャンプすれば彼女を助け

られるだろうかと思案した。
できるだろう。
しかし、その必要はなかった。
神の気まぐれか、それとも天の助けか、どこからともなく雷が落ちた。空は澄み渡るような晴天なのに、だ。その雷はヴァイオレーターを直撃し、つかんでいた少女を思わず放してしまった。
そして、少女は落下した。

少女が落ちた方向へ走ると、枝を力いっぱい引き折る時のような音がした。それに続いてなにかを打ちつける音。体に嫌な感覚をねっとりと塗りつけるような鈍い音だ。
「アイタタタ。自分の放った雷に痺れるなんて、まぬけね」少女が言った。
クロネは腰をさする手を右ひざにまで持っていき、くの字に曲がったその足の太ももを撫でた。
「だ、大丈夫かい？」
ジョンは死んでしまうんじゃないかと思うほどの高さから落ちた少女が、あまり血を流していないのを見るとほっとした。落ちた時に枝が額を切っていたが、しずく程度の流血なら、ないに等しいだろう。
「ええ。はずかしいところを見られてしまったわね。でも大丈夫、木の枝がクッションになってくれたから」
クロネは立ち上がろうとしたが、その瞬間に顔をしかめ、短い悲鳴をあげながら前に倒れてしまった。それは急激な痛みに驚いた人間の出す声だった。
ジョンが慌てて、彼女の体を支えた。
「折れてる……」ほとんど囁くような声で、クロネは言った。
「だろうね。あの高さから落ちたんだもん、命あるだけでも御の字さ」
ジョンはやさしく微笑みながら、背中をさしだした。腰を低くか

がめ、少女が乗りやすいようにする。クロネは少しためらった。
「どういうつもりかしら？」
「どうもこうも、足が折れてるんだろ。医者のところに連れてってやるよ」
クロネはしばらく考えたのち、しぶしぶ首を縦に振った。
「そうね、その言葉に甘えたほうがよさそうね。でも、今回だけ特別ですわよ」
ジョンはにこりと微笑むと、少女が背中に乗りやすいように調整しながら、クロネがおぶさるのを手伝った。
少女の体はとても柔らかく、信じられないほど軽い。もしこれがリルネだったら、これと同じような感じがするのだろうかとジョンは思った。いや、もっと良いはずだ。そこには至福という大きな雲のような柔らかさがあるだろう。そう考えていると、ジョンの顔が運動したあとのように熱く燃え上がった。もし、これがリルネなら――
「そんなに耳を赤く染めちゃって、いやらしいことなんか考えているんじゃないでしょうね？」
まさにクロネの言うとおりだったので、ジョンはしどろもどろした。口から出る言葉は、はたして言葉と呼べるようなものなのかわからなかった。
「ふふふ、冗談よ」
クロネの言葉にジョンは顔も向けないで愛想だけの笑顔をつくってみせた。このやりとりもリルネとの間に交わされたものなら、それは楽しくて素敵なものだったに違いない。もし、これがリルネなら――
やめるんだ。ジョンはその女々しい考えを捨て去ろうとした。いつもは心の奥底に隠しているのに、たまに申し合わせたように浮上してくる情けない感情だ。
ジョンは落ちて来た少女を町医者へと運ぶという仕事に専念することで、考えを巡らせることを抑えた。

その十五分後、ジョンはクロネを背負いながら、街の医院であるジャンローズ・クリニックのある通りにさしかかっていた。道中、街の知り合いに会い、あれやこれやを質問された。会う人全員、ジョンが女をつくったと思っているらしい。どいつもこいつもニヤついた笑顔を顔面に張り巡らせている。そのつど彼は説明し、誤解を解かなければならなかった。余所者のクロネは、すべてをジョンに任せることにしていた。

これまでにふたりは自己紹介をし終わり、少女の名前がクローネンバーグ・ユイソナーであることをジョンは知っていた。

「それで、目覚めたときにパニックになっちゃって、とっさに雷を撃ったのよ」

クロネはジョンの背中で経緯を語った。いままで四人で旅をしてきたこと、そのなかにマコルディス・クイーデルという同世代の男の子がいるということ、ヴァイオレーターに襲われたこと、そしてまた別のヴァイオレーターにつかまり気を失ってしまったこと、そしてとりわけ、落下したときの様子を詳しく聞かせてくれた。

どうやら少女は魔法の力を操れるらしく、ヴァイオレーターに雷を落としたのは彼女本人らしい。なるほど、魔法の力なら晴れ空なのに雷が発生した理由もうなずける。しかしながら、そのあとの落下のことは計算に入れていなかったらしい。直前までクロネは気を失っていたのだし、目覚めてすぐあとの鈍った頭でとっさの本能が働いたのだとしたら、それも仕方のないことだ。敵から逃れて地上に辿り着きたいという願望という点では、思考と本能とでの意見は完全に一致していたわけだが。

「ほら、着いたぞ」ジョンは診療所の前でクロネを降ろすと、しっかりと肩を支えたまま彼女を立たせ、目の前の建物をあごでしゃくった。そこには大きな看板にジャンローズ・クリニックとでかでか書かれていた。

「ジャンロー？」クロネは首を傾げた。

「ああ、医者の名前さ。君を治してくれる。ほら、歩くぞ」

彼女に肩を貸しながらエスコートするジョンの動きに合わせて、クロネは折れていないほうの足でぴょんぴょんとと飛び跳ねるようにして進んだ。

扉を開けると、カラカラとかわいらしい鈴の音が鳴った。室内は日の光が取り入れやすいつくりになっており、明るかった。ジョンに連れられて奥の小部屋に行くと、ベッドに三人の男が寝かされていた。三人は大忙しの治療が終わったとみえ、体中を包帯でぐるぐる巻きにされていた。どれもクロネより重傷のようだ。

近くに白衣を着た男がいた。どうやらこの人がジャンローという医者らしい。

ジャンローはクロネに気がつくと、どうしようもなく塞ぎこんでいる人間でもその悩みを吹き飛ばしてしまいそうな笑顔を彼女に向けた。

「急患ですかな、どれ診察をいたしましょう」

三人は非常にゆったりとしていた。ひとりがヴァイオレーターにさらわれているというのに、さきほどのように誰一人慌てている者はいない。

リアはなにやら下を見つめ、奇妙な形の石を蹴っていた。

アルはていねいに整理された小道のわきに鎮座している大きな岩の上に立って、どこか遠くに真剣なまなざしを向けている。

マコは馬車が通ったであろう轍にたまった水をのぞきこんでいた。まるでそこに追い求めていた真理でも落ちているかのように。

「どう思う？　あれはクロネの雷だったよな」アルは岩から飛び降りながら、言った。

「あたりまえでしょ。こんな晴れた日に自然の雷が落っこちるわけないじゃない」リアは蹴った石が背の高い草むらのなかに飛びこんだので、それを足で草をかきわけて探したが、すぐにあきらめてふたりに近づいた。

「あの妙に紫色の雷はクロネだよ。自然のだったら、あんな色は出

ない」とマコ。
三人の意見が一致したところで、アルが口を開いた。「その方向に街が見えたぞ。とりあえず、そこに行ってみるか」
アルが雷の見えた方角に向かうと、マコとリアのふたりは着き従うように彼のあとを追った。

魔導士たち

その広間の真ん中には大きな机が置かれており、それを取り囲むように三人の男が座っている。ひとりは黄金の縁取りをした黒衣を着て、室内だというのにフードを頭からすっぽりと被っている。もうひとりは短く刈りあげられた白い髪がもみあげからあご髭に繋がり、口髭にまで達している。最後のひとりは喉の皺がたるむほどやせ細った老人で、空色の服の上からベージュの前掛けという聖職者のような出で立ちをしている。フードは向かいにいる黒衣の男とは対照的で、首のうしろのところでおとなしく腰をおろしていた。

三人のまわりには、さらに長椅子が方形を描くように並べられており、それぞれの従者たちが静かに座り、三人の話し合いの様子をじっとうかがっていた。

「それでは、どうしてもこちらに渡してはもらえないということだな」白髪の男――その落ち着きを払った物腰と、真実までを見通すような鋭い眼光、そしてその腰にぶら下げてある立派な剣から、腕の立つ剣士であることがわかる――が言った。

「ああ、あれは俺の部下だからな、俺のところで預からせてもらう」フードを目深にかぶった男が答えた。

「ふざけるな！」白髪頭のうしろにいた男が怒りをあらわにして立ち上がった。

「エド、やめるんだ」白髪の男がうしろにいる若い男に振り向かずに言った。

「しかし、ウィリアム団長、やつらは街の人間に大怪我を負わせた。それをかくまおうとしているんですよ！」

「かくまうとは、語弊があるようだな」黒衣の男が静かに言った。

「俺は自分の部下は自分で処分を下すと言っているのだ。それが部下に対する責任でもあるからな」

「街に対する責任はどうなんだ？」エドがくってかかる。問題を起こした側であるのにも関わらず、上から見下すような男の態度が気に食わなかった。
「それに関してはこちらから正式な謝罪があるだろう」
「それだけでは足りないな」白髪の男ウィリアムはエドが口を開く前に言葉を発した。熟考してから発言するウィリアムにしては素早すぎるといっていいほどの対応だ。それほど自分が粗暴な態度を取っていたのだろう。ウィリアムはエドの発言権を剥奪したのだ。
だか彼の行動がエドの頭を冷まさせたと言っていい。彼は口を閉ざし、腰をおろした。
「なにが足りないというのだ？」黒衣の男が言った。
「結果が欲しい」ウィリアムは答えた。「あなたがたが今回起こした問題に対しての唯一の謝罪は言葉ではなく、結果だ」
「ほう、というと？」フードで男の顔はほとんど見えなかったが、エドには男が眉を吊り上げたのがわかった。
「あなたがたは強引にもヴァイオレーター退治を申し出て、この街に居座った。我々の歓迎を受けていないことを忘れないで欲しい。そしてそのあなたがた我々の信頼を得るにはその申し出を達成するほか方法はない」
これまで黒衣の男は押し黙ってウィリアムの言葉を聞いていた。だがそうするために男が相当の我慢を強いられているようにエドには見えた。この男は他人が自分の上に立つことに慣れていないのはおろか、それを極度に嫌っているらしい。
「でなければ、この村から出て行ってもらうほかないだろう」
「だが、俺たち以外にヴァイオレーターを倒せる者はおるまい。おまえたちの剣ではやつの皮膚に傷をつけることさえできなかった」
ここまで寡黙を保っていた年老いた男が口を開いた。
「じゃが、あなたがたが三回もヴァイオレーターを取り逃がしておることも、また事実じゃ」
「次こそは仕留める」

「そうしてももらわねばこまるな。でなければこの街はヴァイオレーターだけでなく、君たちというふたつ目の厄介ごとを抱え込まなければならなくなるのでな」
男は歯を食いしばっていた。自分がコケにされているようで悔しがっているのだろう。
男の口もとが緩んだ。
「俺たちが厄介ごとだというのなら、古の魔女とやらはどうなんだ？　そいつも追い出すつもりなのか？」
古の魔女という言葉を男が口にするのを聞いて、年老いた男は驚いて顔を強ばらせた。それを見て、黒衣の男が嬉しそうに口もとを吊り上がらせた。
「キンバリー長官殿、どうだろうか、俺たちがその古の魔女を退治してしまうというのは」
老人は首を横に振った。
「やめてくれ。魔女に手を出せば、街に仕返しが来る」
男は声を上げて笑った。
エドは立ち上がった。両腰に差している二本の剣のうち、片方に手をやる。この場でフードの男を叩き斬ってやる心づもりだ。
だが振り返ったウィリアムに鋭い眼光を向けられて、エドは座った。
「俺たちに楯ついても、仕返しが来るかもしれないぞ」男は言った。
「どうあがいても俺たちの魔法に、そこにいる騎士団の剣が届くとは思えない」
なんという暴挙にでたことか。あろうことかこの男はこちらに脅しをかけ、自分のほうが立場が上だということを示そうとしている。
エドは腹の中に焼け石を突っ込まれたような気分だった。いつ口から炎を吐き出してもおかしくはない。
「まあ、そんなことは起こらないと思うがな」と黒衣の男。「心配しなくとも、俺たちがヴァイオレーターを倒してやる。そっちは俺が提示した報酬を渡してくれればいい。そしたら大人しく出て行っ

てやろう」
そう言うと男は立ち上がった。
「それまでは俺の部下たちの少しの粗暴には目をつむってもらうしかないな。だが、約束する。少しは控えるように言っておこう。それでいいだろう？」
「我々はただ君たちに問題を起こして欲しくないだけじゃ、ヴァイオレーターを倒してくれるのなら、約束の報酬は払おう」キンバリーが答えた。
「よろしい」
黒衣の男はうなずくと、退出した。男の背後に座っていたふたりの男――ひとりは前歯が欠けて鋭利になっており、もうひとりは左頬に猫の髭のような三本の細い傷がある――立ち上がると、黒衣の男に着いて広間から消えて行った。
エドはその場に座ったまま、言い得ぬ敗北感を歯で強く噛み締めた。
黒衣の男は最後まで自分が優位にある立場を保守したまま立ち去ったのだ。

ウィリアム・クラウス騎士団長は寡黙を保ったまま考えこんでいた。キンバリー長官はその様子をおずおずと見守っている。ウィリアムの弟子であり、騎士団の副団長であるエドはまだ煮えたぎる思いがあるのか、空中をじっと睨んでいる。
「まるで盗賊じゃないか」エドが口を開いた。「こっちは食事まで無償で提供しているんだぞ」
「信用はできないが、やつらの力に頼るしかあるまい」ウィリアムが言った。その声に揺らぎはなかったが、焦燥が感じられた。
「君たちでも歯が立たなかったヴァイオレーターを追い返してみせたのは、他でもないやつらじゃからのう」とキンバリー。
「悔しいですよ」エドは言った。
だが、どうすることもできなかった。くだんのヴァイオレーター

に剣は歯が立たず、問題の魔導士たちがやって来なければ街は今頃酷い有様だっただろう。
一週間前の惨劇をエドは覚えている。
街中がパニックと恐怖の入り混じった悲鳴で満たされた。
騒ぎにウィリアムたちが駆けつけると、巨大な翼を持った爬虫類型のヴァイオレーターが西側と南側の壁とがちょうどぶつかる辺りで暴れていた。シャズの骨董品店はほとんどが倒壊しており、血を流している者、倒れている者、死んでいる者などで騒然としていた。
ウィリアムは剣を抜き、果敢にもヴァイオレーターに斬りかかった。敵は細長い首をのばし、迫りくる戦士に噛みつこうとしたが、ウィルは素早い方向転換でそれを避けると相手の首の根っこに刃を突き立てた。鋭い摩擦音と火花が飛んだが、ヴァイオレーターの皮膚には傷一つできていない。
少し遅れてうしろからエドが突進した。両腰から牙のような刀身のショートブレードを抜き、その二本の剣で胸部を斬りつけた。やはり同じ結果だった。
それから師弟はふたりでヴァイオレーターとの攻防を繰り広げた。その光景を騎士団の団員たちは黙って見ているしかなかった。ただただ畏怖の念でふたりの戦いを見つめていたのである。
だが、ふたりの戦いはその激しさとは裏腹に相手に与えるダメージは皆無だった。傷ついているのはヴァイオレーターの皮膚ではなく、彼らの剣のほうだ。
「くそっ。化け物かよ、こいつ。全然、刃が通らない！」エドはぜいぜい喘ぎながら言った。
「化け物だよ」ウィリアムが答えた。「ヴァイオレーターはみな化け物だ」
ウィリアムの言葉に答えるように、ヴァイオレーターは喜び勇んでその尖ったぎざぎざの歯を、彼に当ててきた。ウィルはそれを剣で弾いたが、それが限界だった。手は痺れ、体力は――くそ、俺も歳だな――底を尽きていた。

ヴァイオレーターはこれがトドメだと言うように、最後の咆哮を空に向かって放つと、ぎざぎざに尖った歯を剥きだしにしてこんどはエドに噛みつきにかかった。エドは首をすくめて身構えたが、足がもつれて尻餅をついてしまった。

彼は命をあきらめた。牙が彼の体を貫くのは確実だった。だが、牙が彼に届くことはなかった。

ヴァイオレーターは長い首を持ち上げて、苦痛に叫び声をあげた。さきほどヴァイオレーターの顔があった場所に爆煙があがっている。

いったいなにが起こっているのか、エドにはわからなかった。ウィリアムと目が合ったが、彼も状況がわからないといったぐあいに肩をすくめてみせた。

「剣が効かぬのなら、俺たちの魔法で撃退してやろう」

黒衣の男が十数人の男たちを引きつれてやって来た。彼らは円陣を組んでヴァイオレーターをとりかこむと、両手をヴァイオレーターに向けた。その手の先がぼんやりとひかり、赤、青、緑など様々な色に輝いた。

かと思うとその光は放たれ、ヴァイオレーターに降りそそいだ。

ヴァイオレーターは苦しみ、大きな翼を広げて飛びたとうとした。男たちは上に向かって追撃を放った。光はヴァイオレーターにさらなるダメージを与え、街を襲った怪物は上空を上下に揺れながら街を囲む壁を飛び越え、そして退散した。

黒衣の男は名をヴァルマーと名乗った。彼は礼を告げるウィリアムに対してヴァイオレーターは必ず戻ってくると言及し、自分たちを雇うことを勧めた。そしてその通りになった。二回、三回と起こったヴァイオレーターの襲来は街にさらなる被害をもたらした。

その都度、ヴァルマーとその配下たちによって撃退されるのだった。

そのような出来事があったからこそ、キンバリー長官は魔導士たちを追い出す決意を下すことができないでいた。魔導士たちは街の

治安を乱しているかもしれないが、それ以上にヴァイオレーターの脅威から街を救っているのだ。少なくともいまのところは。
まさに板挟み状態だった。
「魔導士たちの問題を残して街を離れるのは気が進まんな」ウィリアムが言った。
ウィリアムは明日、数十人の部下を引き連れて使者として北のエムードラ領へ向かうことになっている。王都で会議があるためだ。そこへウィリアムは国が管理するこのシエラの街の代表として赴くことになっている。
そこで二、三の事務的な報告と業務があるのだ。
「あなたがいなくとも、俺の目の黒いうちはやつらの好き勝手にはさせませんよ」エドは自分に言い聞かせるように言った
「そう願いたいな。なにも起こらねばよいのだが」
ウィリアムは吐息のようにつぶやいた。

シエラの街

独立都市シエラの東門近くの防壁は無残にも破壊されていた。防壁は街の四方を囲み、まるで年頃の少女のプライヴァシーを守るかのように街並みをすっぽりと覆い隠しているのだが、そこにあいた穴のおかげで中身は丸見えだった。といっても、ほとんどが民家などの屋根ばかりだったが。切妻屋根や尖塔が見える。

「お腹を空かせた子供が食べ物欲しさに暴れたにしては、大きな被害よね」リアが言った。

「それって、君のことだろ？」アルが子供のようないたずらっぽい笑顔を浮かべながら言った。それを聞いて、マコは笑った。

「あら、アタシのようなレディはお腹が空いたからって、暴れださないわよ」

「よく言うよ。あやうくバーベキューにされるところだったこともあるのに」

アルはとある日の出来事を思い出していた。

あれはリアが仲間になってからまもないころ、リアは空腹を訴えたが、アルはそれを拒んだ。時間もまだ早かったし、手持ちの食料も底を尽きそうだったのだ。彼はなるべく温存したかったし、できれば夕食だけで凌ぎたかった。だが空腹もそのイライラによる怒りも頂点に達したリアは、食料を出せとアルに攻撃をしかけたのだ。それも魔力によって超高温の炎を発生させて。

あの炎の熱さがいまでもその額に頬に感じられるようだった。それは上から照りつける太陽のせいでもあるだろう。とにかく、リアが放った攻撃を避けこそしたものの、アルはもう少しで焼き殺されるところだった。大げさに言っているのではなく、本当に。

「あれ、そうだっけ？」リアは乾いた笑い声をあげた。

門にはふたりの衛兵らしいき人物が立っていた。

なにやらただならぬ緊張感が漂っている。
「やあ」アルが声をかけた。
ふたりの衛兵は三人に順番に目配せをし、危険はなさそうだと判断すると、いくらか緊張を和らげたようだ。それでもなお、ふたりからは緊張感が感じられていたが。
ひとりなどは上空を気にしながら、ちらちらと空に向けて不安そうな視線を送っている。
「ようこそ。ここはダヒチ領四番目の独立都市シエラです。そしてわたしがシエラ騎士団がひとりフィッチャー・ジョアンです」
ダニーが言い終えると、もうひとりが空から目線を落として言った。
「同じくダニー・マックスウェルです」
「騎士団ってことは、この街には麗しいお姫さまでもいるのかな」アルが言った。
「独立都市だから王族じゃなくて、長官が治めてるはずだよ」マコが言った。
「騎士団っていうのは、まあ、名ばかりですね」とダニー。「ここに街をつくったのがいまの長官の曾祖父と、彼と連れ立ってやってきた元騎士だったんです。で、街ができる際にその騎士が自衛団を発足し、それを騎士団と名づけだけです」
ダニーは説明している間にも、空の様子をちらちらとうかがっていた。その顔はとても心配そうだ。
「元騎士ってことは、この近くのエムードラから来たの？」マコが訊いた。
「ええ、そうです」ダニーが答えた。「ふたりともお城に仕えていた頃からの友人だったそうです。いまでもこの街は長官による政治と騎士団団長による治安維持によってまわっています」
ここでリアが大きなあくびをひとつした。
「お勉強って嫌いなのよね、アタシ。歴史の勉強なんてとくに」
「これは失礼いたしました。いやあ、街の歴史となるとつい我を忘

れてしまうもので」
「いや、気にしなくていいよ。特にコイツのことは」アルがリアを指さして言った。コイツとはなによ、とリアがこぼしたが、アルは続けた。「おかげで街のことがよくわかったよ」
「うん」マコがうなずいた。「それでボクたちがこの街に来た理由なんだけど……」
「ええ、なんなりとお申し付けください」ダニーが胸を張って言った。
「それが……ちょっと言いにくいというか、突拍子もないことのように聞こえるかも知れないけど――」
マコは自分の言いたいことをどう表現していいかわからずに、言葉を濁して言いあぐねていた。
その横からアルが率直に言った。
「空から女の子が落ちてこなかったか？」
ダニーとフィッチャーは驚いたように顔を見合わせた。
「その女の子なら――」ダニーは言った。

ヴァルマーはウィリアムとキンバリーたちから解放されると、すぐさま自室に戻り、レイアンとクアーズを呼びつけた。
ふたりは直属のボスの前に立たされると、緊張して体を強ばらせた。
「なぜ呼ばれたのかはわかっているな」
その声を聞き、さらにふたりは緊張した。
「でもあれは、あいつらが始めたことで――」レイアンが口を開いた。
「だれが言い訳を聞くと言った？」ヴァルマーがそれを遮るように口を開くと、ふたりの緊張は限界にまで達し、彼らはわずかにあとずさりした。
「わかっていないようだから言うが、俺たちはこの街に留まりに来たのであって、追い出されるためではない」

「それは十分わかっていますよ」とクアーズ。
「だったら騒ぎを起こすな。そう最初に言い聞かせておいたよな。それをどうだ、おまえ達は街の人間に大怪我を負わせ、不信感を買う結果となった」
「すまない、軽率な行動だった」レイアンが反省の意を示した。
「それがわかっていれば良いのだ」ヴァルマーは許しを与えた。それを証明するかのように両手を広げ、歓迎の意を示している。「次はこのようなことがないようにしろよ。チャンスを与えているのだからな」
「ええ、わかりました。今回のようなことは二度と起きません」クアーズが安堵の吐息まじりに言った。
「ああ、俺もだ。もうしねえ」
「もう行って良いぞ」
レイアンとクアーズはお互いを安堵の表情で見合い、部屋を出るため、ドアまで向かった。
「ところで――」ヴァルマーが口を開き、ふたりは足を止めて彼のいる方向へ首をめぐらした。「おまえ達がそのチャンスを発揮するのは地獄でだ。ここではない」
「え？」クアーズが震えるような声を出した時、ヴァルマーの手がのびてきた。
実際には彼は自分のデスクに腰を据えたまま、両腕を組んでいた。だがふたりは彼の包み込むように大きな手が彼らを握りつぶそうと迫って来るのをその肌で感じていた。
体が握りつぶされるような圧迫感を感じ、ふたりは立ったままのたうった。その締め付けが内部からも外側に向かっているような感じがした。
息が出来ない。大きく口を開いても、喉が擦れるような音をたてるだけで空気が入ってこない。
ふたりはやがて息絶えた。

ヴァルマーは息絶えたふたりの体がお互いに頭を付き合わせて倒れているのを見おろしながら、満足そうな笑みを浮かべていた。
力はすべてを操作するためにある。
ヴァルマーはそう思っていたし、それを常に実行して生きてきた。だが、常に力が発揮されるというわけではない。今回のように手の外側で思わぬ事態がおこることもある。部下の行動を完全には抑制できず、街の人間に反感を与えてしまった。もともと信用されていたわけではないのに、さらに不信感を募らせるという形になってしまった。
それも力によって抑えることができたわけだが。
ヴァルマーは自分たちに絶対的力があると知らしめることで、あのウィリアムとキンバリーにどちらの立場が上なのかはっきりさせてやることができた。そして勝手な行動を起こす部下はその力で消し去ってやることができた。
どれもこれも、彼と彼の魔導士軍団がその時までこの街に留まる必要があったからだ。これは絶対に実行されなければならないことであり、あの方たっての希望なのだ。
そのためには力が必要だ。
そしてヴァルマーはそのために必要な力というものを十分に持っていた。

三人にとっては意外なことだったが、クロネはすぐに見つかった。それはこの街を警備する騎士団の連絡網の幅広さと、それを伝う情報の早さのおかげで、各門番にも彼女のほとんど事故のような来訪が伝わっていたのだ。もちろん彼女が診療所で治療を受けていることも。
「いやあ、でもみなさんはとんでもない時期に街にやって来たものです」クロネがいる病院への案内の途中でダニーが言った。
「とんでもない時期って？」一番に反応したのはリアだ。事件でも期待しているのだろうか、期待の眼差しをダニーに向けている。

「ええ、最近出現したヴァイオレーターの噂は知っていますか？」
「知ってるわよ。何度か会ったことあるもの」
「何度か……？　まあ、そのヴァイオレーターが街を襲うんです」
「じゃあ、あの壁の穴はヴァイオレーターが空けた穴なんだ」マコが言った。
「ええ、そうです。他にもいくつかあります」
「てっことは、何度も襲われているのかい？」アルが訊いた。
「ええ。だからとんでもない時期にと言ったのです」
「そんなのアタシたちでやっつけてあげるわよ」とリア。
「うん」とマコはうなずいた。「今度来た時がそいつの命日だ、だね」
「ははは。君たちに勝てるなら、俺たちがすでに倒していますよ」ダニーが笑った。
「でも、倒してないじゃない。アタシのパンチがあれば、ヴァイオレーターなんてイチコロよ」
リアは右腕を二回、前に突き出してみせた。
「そう、頼もしいですよ」
「そうよ。まあ、期待してなさい」
リアはダニーの皮肉に気づいていないようすで、得意げだ。
「ほら、着きました」
ダニーは立ち止り、左手にあった診療所を指差した。マコとアルは彼の前方を歩いていたので、あやうく通り過ぎるところだった。
その診療所はジャンローズ・クリニックという看板が掲げられていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7922z/

マコと一葉の剣　グラス・オニオン

2011年12月30日23時49分発行